青山御流

活花手引種

二

二之巻凡例

○此冊ハ三の巻ニハ初心の挿なしたる体を其侭あらわし数多図し
それぞれとしるしたる形を得て其人の好みより左右合考して
手際長短浅深高下なと集むへし

○花實草木春秋の次第をもて順をつけ次されとも大凡乃ミ
にして時候の遅速にかゝわらす次

○倭漢異名方言の類ついひとつに志るさハ混して却て
繁雑なるへし故に耳近く聞なれたる名ハ志るさす次第
遠く紛らはしきものハ同名異物の類を倭名漢名の次第を
撰ひ次十に二三をのする

かくのごとき花ぶりハ瓶とのうつりにて悪し

花器細きものハうけ少なし 梢と幹とを揉めて

瓶の真中が通り入べし また根曲りて水際

ぶりがかりハよくためて添へしごとくして揉からハ据め残

いまだためべし 仕様委くハ初巻に記せり 何も其意を推て入べし

なをも左にあり

此通り今の姿様に入べし

此幹をよく揉めて強く入べし

此ところにて揉 乃だし梢とのせべし

梅

図のごとく幹を抑し 梢と瓶の

中へ蕊を下の枝も添ひて挿べし

また水際のあまりかくのごとく伸し 約まやかにひきしめ入べし

梅は梢あるゆる風情のもの故ハ大抵此趣を以生べし

形の変化ハ四巻目に委し

如図瓶により枝左右へ出或ハ月の?見さし入ることハ悪し
惣して掛瓶の水際ハしほらしく
出様よく出して下椿も猶すそに入る
ことを宜し後のなをしをするべし

如是上より下枝まで於なしふりよ
伸び出る枝ハ悪し去るに水際
まて十文字にさえてよろし次
左の図を考へ見るべし

白梅
山茶花（ツハキ） 海石榴トモ
以下通用ニ随テ椿字ヲ用

かくのごとく梅の梢ハ強くのして
水際ハしほらしく垂くしてみて椿ハ
つぼまりて生くべし

圖のごとく何程風情おもしろくとも茎器をふ切りては悪し
ことに横も庭にみるて然し添も外へあまりに添ふるも
よろしからず陰の心をもとゝ考べし

如此茎の枝をきでういくのすじとみとけて入べし
また福壽草を根ゝまで添ものにて其趣をえたるべし

梅

福壽艸

元日艸トモ
報春艸トモ

かくのごときの柳ハしだり多き
枝ハ伸ひをくへし
なと左の支補しを考へし

青柳
つゝれ

かく柳の枝もをゝし
つぼきもつまやかに入へし

かく茎太びよくして葉なき梢ハ何にても花と葉のかゝりに
みだりに引つけて生なりよろしく陰に添へ生る枝本末
右くきにいれかへて宜し いづれ一方へ
用ゆべし

かく梢のさし出る枝を除きつぼみのところ陰をたんとして
横生し其らをきりて本を揉め之陰に
そく直し 但生ちゝんハきらざるも此なり

辛夷（コブシ） こでこぶしる
木筆トモ
望春トモ

桃（もゝ）
仙果花（せんくわ）トモ

かくなびきかゝる
りんハ伸子ほう次枝を出と
あまりしてかろ〳〵と志ほしく出へし
ことにかさねつるゝなとの上枝ハ大ひなる
時ハ器のこけんをもおほつかなし
此の出しをなくへし

蘭ハ葉組乱れ
て悪し

垂絲櫻（シダレザクラ）
垂絲海棠トモ
春蘭
獨頭蘭トモ

かく枝をはなして
風情ものよくひつようにみゆるほと
余情ふかし

蘭ハ上下の葉をつけて出へし
なんと若葉のこゝろへあり

かくのごとく沢八水の枝伸びはきき
まさ水際をよくそろへて出すべし
然して山ぶき卯乃花
金糸梅金糸桃の類ハ
いつれもこの心を以て
入るべし

小毬（コテマリ） 粉團花ナリ
方言 そでかけとも
こでめる形ゆゑ

如斯 中より出る長き枝を
ちぢめへらく水際をひきく
生くし ゆきやなぎ 萩
大手まりおなじく
なるべし

かくのごとき花は梢つよくして山ぶきのなびく情薄し
ゆへに是は格別なるあきき枝は
なびく風情を見るところ也
外体来相なる也
いづれも相似し

山吹
棣棠ナリ
酴醿花トモ

やまぶきはかくのごとく高下なびけさせ左右長短に生し
なども葉茎の葉のあらはるる様に生座し又小手あり
卯乃花萩なども
外なびきも此に依て同意なり
外体重ねの事あり

そろもあつていづれも合て出るときはあしかれどもかく表裏ある
大葉蘭などは陰陽のうちをまもらし前を離しものごとく組べく
是くしよく作もかくきる右前なる葉を出さば悪しきの図を考べし

図のごとく一方を伸ば一方を縮めて入るべしまた陰陽も
かくのごとく組ぬしこれをかりに二株ともいふなり左右曲直
前後俯仰時宜に随ひて見計ふべしなどを其の図どもを見るべし

大葉蘭

ヒトツ葉蘭 葉蘭トモ

ぬ是ハ風情ハおもしろげなれども表裏のくさ移
悪しくまた一体もあるところなくゆるしがたし
活きくもあらんてし

図のごとく陰陽を組紫を約めてよりよく立て出るよし
かく根の細きものハ何にても次の際の強て高きハ悪し
お体おくにあり

ぬ此の花形ハひらきさ
るとて余情薄し左のごとく
水際ハ一寸引しめてよく出て
すこし志やがも表裏なくしく組て
左をうくべし
おく一寸ハたんまに添へ引上ゲて差べし
海棠 カイダウ
海紅トモ
志やが裏にくべし
かく志やがも
陰陽を栄す見分けて入べし

かく枝茎あらハ葉あらきを
なるハ悪し或ハ葉さきなど
かく鏡のふちよ
りさしかゝりてもゆるも
よろし或ハ沢それよ
りそびえを長く於し九
いざしめぐらし
入れるハ殊によし
夏の圖と
すへし
薔薇（イハラ）　長春トモ
尤影多し
かく月形器舟などの茶形全体を
切し出し摩掛けて入ハ格別まづ
かゝく入まる時ハ引きあて
立除しと見てよし上下
月の輪が障りあらば
なくざるゆへ輪の内
まで仕組てもよし
外ほ意をいかく
推へし
十四
十五

かく梢前方へなびきたるはあしくいづれ
一方を添ひて上下ヨて麁にくし あしらひはなびきなきを
とり合せゆくきほくこきへし
紅楊櫨（ヘニウツキ）
錦帯花トモ
海仙花トモ
十姉妹トモ
はこねうつぎとも
かく上下左右よふり合せて入へし
下は仙臺萩なかくよきを取合て
きこえよし

如此水際より乱るゝハ悪し
ほとばしる才の枝を添て水際の枝を
添くて入るべし　次をみへ

櫻艸も二株ニ組合べし

えにしだ　金雀花なり
もくれんつゝじ
躑躅花
種類多し

二種ともにめぐり留りを入
さくら草もかく組べし

櫻艸
さくら菜とも

かくたうもんなるものと茎多く葉盛ニ生ハ悪し 葉を厚く
茎太く好ニ挿べし 大きニ際などハひそく葉ニ厚く垂へし
尚花のなくとし挿べし

芍薬（シヤクヤク）
花相トモ
牡丹トモ

尚風情のあまりあるハ菊ニ同く準べし
後の巻を見べし

花
かくのごときハ梢へ瓶上を涼しく見せ 次の枝を
ぶんとして梢をきり去りて水際に見すかし かく水際のハ要
なるをみハ捲のごとくなみに流し萩なと茎うつほして
まうるんあるし
映山紅
キリシマ
仙臺萩
ほそらなとハめ是一色をまさりし出すにことことく一両
類ハそめのごとくなるもの也 ゆくすゑ出り形好き
を求めて入るべし

如是左右へとり乱れ
出るハ悪し 次の図を
見べし

藤（フヂカヅラ）

如斯とりまめて一寸ゝ
出るべし 此釣舟の
こ舟を以入べし

美人艸
麗春花トモ
錦被花トモ

如此ハ水際の葉混乱しよき流るる葉も残さで
悪し茎もつぼみもつまりて狭し次の図を
考ふべし
すかしゆり
百合ナリ
山丹トモ
かく水際の
葉もみだれずさしを直して葉の勢ひ
よき葉ばかりを残すべし

め是ハ葉四方へひらき茎を
のり形しく高し次のなくとしとみべし
いちはつ
紫雀傘ナリ
紫蝴蝶トモ
鳶尾草トモ
かくまはのはなる
図のごとく花ある長き葉をとつて右の
ちかき葉に准て花とものをくべし

かく表裏混さしたるハ悪し　奥の手て花鏡
あしらひもいろ〳〵かさね払ふはしてきへし
作次第なるへし

著莪（シャカ）
胡蝶花ナリ
鳶尾花トモ

かく表裏をちらし水際を
つめてきへし　其体かさつなるは
惟てよし

ぜに葵などハ丈高く入るゝハ悪し 枝茎くねりて
添ひかさく風情能し 前の形ひきく入べし
手ある篭などハおもしして小体に入れバよくうつる
右の形り次の表しをみるべし

錦葵（セニアヲイ）
こあをひとも

かく枝を表裏にふりかへ指くとのぞき
葉ぞろりとなるをもちひ水際ひきく入べし

如是二本楷ハ真を年して長し詳まき一本ゆへ余情薄し
伸さるおりを勇て添へし　ゆりをまさそわぎしてよ結びかば
真子なしして株を一壷し
深くとるべし

まつごく水際の様あへし　枝をそりて添まへし　様あとハ株も
そくもみ取りゆりを生ける所　楷子なく見せきつてさしたるより
此おこの意得て時宜ゆべくつひ
当くなるべし

槙（テキ）　被ナリ
くさまきとも
高野まきとも
称るあり

ゆり

かく陰陽あんまりいかの中に
のけ次まで出あるなるのことを
当ふしてとりなくし
きるハよろし
かくすぞ
次の図をみるべし
萱艸 クワンサウ
忘憂艸 ワスレクサ トモ
但茎の八重なるハ毒あり
かくのごとく葉の俯仰をまじしつぼみやうにまくし
但茎の折ところ葉裏陰陽子順てころくあり

この菊種多くして品し　あるは茎たかきもあり　あるハ三尺にゆるもあり
余情薄し　寒菊にして小花葉とも手からへし
あるは陸の花葉も高く斜めならへし　この花も高くて品し
左の図とらんへし

さんくるい艸
熊野菊

外此類をも推して見はからふへし

如此ハ老木も経あるのさまにて飾り風体をみするなり
何事も老くしつくハ株元水際に葉をなすとも
其角へ寄へし次の図を見るへし

如是のりとなびきをつけて挿へし
或ハ長け高く枝葉しげく花多く附ハ
是程に挿へし　随分長くして入るへきなり

蜀葵（アフイ）
戎葵トモ
一丈紅トモ
單重紅白數多有

きばうしゆ葉三枚ヶでは花一本まてよし　但三枚ヶ一本
まてハ四本となれども苦しからず
又きばうしゆハ一株ヶ葉
四枚まても花ハ一本ヶ限まてハ
なり是ハ葉ニて取のことなり
本ヶ陰陽の論を以株の
様と成となり得の園とすべし

如是の杜若ハ葉組乱き
てよし花の葉もおちそ
後手まさくていよし
但シ初巻ヶくはし

きぼうしゆ

杜若（カキツハタ）
燕子花ナリ
劇草トモ　馬藺トモ

二種とも花葉の挿もむさく
如是尚えの園とすべし

次の図を見べし
かく陰陽をまじへ上下の様をうけてくむべし
別体おほくあり
擬法珠
玉簪ナリ
白鶴仙トモ
紫萼トモ
蒠花
甚だ異名多し

柏 カしハ
大葉櫟トモ
抱トモ
ひめゆり
山丹トモ
三十二
三十一

花菖蒲も杜若のごとく葉をあはして組べしかくハ枝へ
伸びたる形にて組たるハ悪し花杜若より葉細くよわき者ハ
高くも立葉ハ中墨の強きをと撰びて立べしこの図をみて知べし

花菖蒲（ハナシヤウブ）
泥菖ナリ
沼あやめとも

かく葉を組まぬゆへよくよく見べし
別件ハ杜若に准ずべし

かく花ぶさ大ひにして茎弱く葉の跡無る
ものを押し伸してきハひかし切みて忘し
たの事しるべし

紫陽草（アヂサイ）
繡線花トモ
俗ニ七變化トモ

かく中を下にとりちかへにばかり伸し出すよし
またく葉ばかりのえだを添て葉の落たる所を
補ふもよし

さゝゆり 百合
杉にゆり 思
この作上二輪ハよろしけれども瓶と乃きゝ過て悪し
左の図を見るべし
図のごとくんせ瓶子に挿るやうに出生を見立
或ハ手をそへて形りよき生べし ゆりの種数多し
何れもこの心得を忘るべし
三十五

馬盥轡留

馬盥唐銅に種々の傳説あれども當流にハもちひず夫ハ蘆
新銕に造りし器物なりとも名の授拙それハ貴人方招請を
私亭ハ勿論常茶会の席とハてそ出上の具にても茶家ならむ
出し此むさとなくとりもちゆることありとてそおそに轡のくみかさ
に設なし生る草のとゞえよきやうに入くべし此ハ小刀とあ
くさり当砂利と名盤皆即坐の一興なり仕様三巻目のま
にあるを鍵と名ハ仕方おに出次圖を見て考ふべし